# やっときゃよかった、やっててよかった防災式

◆シリーズ「あなたならどうする？」地震編パート６

内閣府「中央防災会議」が、駿河湾から九州沖の深さ約４千メートルの溝「南海トラフ」を震源域とする巨大地震への対策をまとめた。

最悪の場合に死者３２万人、経済被害２２０兆円と推計される被害をできる限り減らすため、官民が広域で対策をとるための法整備が必要だと指摘。

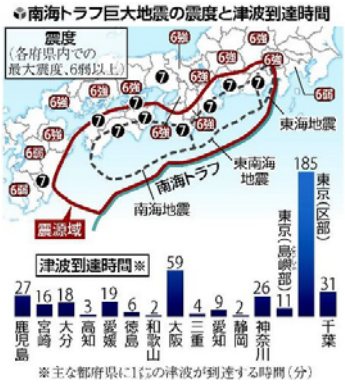
南海トラフ地震ではＭ９クラスの地震が発生し、震度７を含む強い揺れと、３０メートル超の巨大な津波が広範囲で発生した場合、国や自治体の支援が被災地域に行き届かなくなることが想定される。国の防災基本計画では、食料や飲料水などの家庭備蓄は３日間分を目安としていたが、これを１週間分以上に拡大し地域で自活する備えが必要とした。

さて、あなたはこの発表を聞いてどのような対策を取りますか？

「３日程度で大丈夫だと思ったグループ」と「１週間分を備えようと思ったグループ」の２つのグループに分類して考えてみましょう。

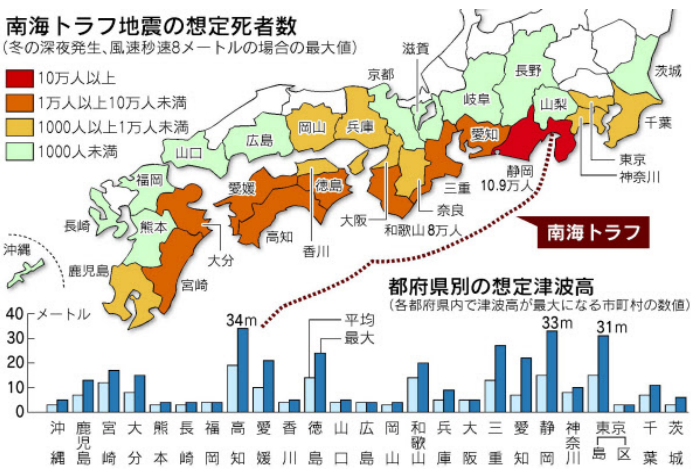
３日程度で大丈夫だと思ったグループは、過去の震災経験から「３日もすれば、誰かが必ず助けに来てくれる」と思っていませんか。阪神・淡路大震災や中越地震等は、小さなエリアで発生した強い地震でした。混乱している被災地から少し離れると、普段と変わらぬ生活環境があり、企業や公共機関等も被災地以外ではライフラインがほとんど無傷だったのです。東日本大震災の場合は、津波により沿岸部は大打撃を受け広範囲で大きな被害が発生しました。しかし、東北道が全線活用でき、東北道を背骨に「櫛（くし）の歯作戦」と呼ばれる、東北道から直結している国道を通じて、沿岸地域への物資供給ができる救援ルートが確保できたのでした。

ところが「南海トラフ地震」となると話は大きく変わります。拠点となる東京都心部も交通マヒ、続く東名高速から名古屋までが大打撃をうけ、東日本からの関西への物資流入が途絶え、四国は全域が津波の影響で交通マヒとなり、中国地方や九州からのルートも、なんとか通行可能だとしても、それぞれの沿岸部は津波による大きな被害で他の地域への支援ができる余力があるかどうかということです。




北陸や山陰からの支援が期待できたとしても、東京から九州までの広域被害地を少数の未災地が支援することは、ほぼ不可能に近いでしょう。当座は被災地自身で復旧復興を目指さなければならないと考えられています。そう考えれば、自分自身が他人や行政を当てにしない位の備蓄を心掛けなければなりません。

１週間分を備えようと思ったグループは、４人家族の場合どの位の備蓄を考えますか？確かに多いに越したことはありません。しかし、この備蓄意識が継続しなければ更新することを忘れてしまい、数年後に賞味期限が切れたことも気づかず、災害が発生した時には食べることができない備蓄品が存在するというお粗末なことになります。一時的に防災意識が高まりますが次第に「のど元を過ぎていく」と言う「防災フェードアウト現象」が起こります。これは普段馴染みのないもの、必要としないものを備蓄したことで起こる現象です。物置や押し入れの奥に仕舞い込み、日常の中で目にすることがなく忘れていく人間の心理です。このような「備え」ではなく、日常的に使い、日常的に食べ、日常の生活サイクルの中に存在させることが大切です。一時的に大きな費用をかけて備蓄をしても忘れてしまう。それよりも日々の生活で使ったら買い足し、少し余分に買っておく。食料も同じことで、今までの無くなったら買いに行く習慣を、少しだけ余分に買い、無くなる前に購入しておくということを身に付け、そのサイクルを習慣化させてしまうことです。例えば、備蓄食料も普段食べないのではなく、食べたら食べた分は必ず買い足す家庭の決まり事を作ることです。逆に言えば無くなるほど食べてしまわないことも大切な備えなのです。また、家族で自分たちの好きなもの（半年以上の賞味期限があるもの）を話し合い、次の購入計画をたてる等の「楽しく家族で防災会議」を行えば、家族全員で備えることへの意識が芽生え、食べたら購入計画をたてる、といったワクワクする備えをやりましょう。一時的に大きな金額の出費は継続した活動に繋がらないのです。

そのためにも「個々が責任を持つ時」が来たのです。

今回の防災式は、「**継続**」です。「災害は忘れたころにやってくる」忘れなければ「小さな災い」で済むことでしょう。おや？備蓄も大切だがトイレが・・・